



Title	曾士才教授インタビュー
Author(s)	曾, 士才; 小林, 英俊; 緒川, 弘孝
Description	付属資料 (2)
Relation	コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究 ～観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けて～ = Case Studies of Community-Based Tourism : Towards a Sustainable Happy Relationship between Tourism and Community
Citation	CATS 叢書, 3, 203-210
Issue Date	2010-02-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42688
Rights	© 2010 北海道大学観光学高等研究センター、財団法人日本交通公社
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATSLibrary03_203-210.pdf



(2) 曾士才教授インタビュー

日時：2006 年 7 月 6 日木曜日 14:00～16:00

場所：法政大学ボアソナードタワー 2209 号室（曾先生研究室）

出席者：法政大学国際文化学部

曾 士才 教授

財団法人日本交通公社

小林 英俊 理事

緒川 弘孝 客員研究員

○論文、記事、文献等の検索、参考の結果、中国貴州省の観光研究に第一人者と考えられる法政大学の曾士才教授を訪れ、貴州省の観光状況や現地調査に対するアドバイスをうかがった。

<貴州省の観光開発の流れ>

- ・ 貴州省の観光は、80 年代の環境観光、90 年代の民族観光、21 世紀に入ってから生態観光という形で重点を変えてきている。
- ・ 生態観光は、エコツーリズムとも言えるが、環境観光や民族観光をひっくるめてトータルで考えていこうとするものである。中国でも、今はエコツーリズムに関する研究が多い。
- ・ 貴州省の観光は、80 年代初頭、西線と呼ばれる西側の地域が先行した。貴州省内に国際空港がなく、国外からの観光客は雲南省の昆明から入ってくるために、西側の黄果樹瀑布に代表されるような環境観光が中心となっていた。当時の貴州省への国際観光客の 7～8 割は香港とマカオからであり、その関心は名所・旧跡、歴史・文物、自然だった。そうした観光客のニーズに、従来型の環境観光がマッチしていた。
- ・ 西部に比べて東部は観光開発が遅れ、85 年ごろからである。東部にも、梵浄山自然保護区や舞陽河¹の川下りといった環境観光の資源があり、桂林とはまた違った石灰岩の風化した自然景観も美しい。
- ・ しかし、それらの観光資源は国家級の国立公園内にあるため、観光振興をしても、その利益は中央政府に行ってしまう。そこで、黔东南苗族侗族自治州では民族観光に目をつけたのだと思われる。民族観光であれば、収入が国ではなく、自治州のものとなる。貧しい地域であり、収入源となるものが他になかったところから、民族観光による開発が始まった。

¹ “舞”の字は現地では“さんずいに舞”の字で表記。フォントが無いため以下、“舞陽河”と表記する（編者注）。

<貴州省の観光の最近の動き>

- ・ 1998 年 10 月には、ノルウェー王国と中国政府が協定を結んで、六枝梭戛生態博物館が設立された。その後、生態博物館は貴州省内に合計 4 ケ所（六枝梭戛を含む）設立されている。生態博物館は、風景名勝区、自然保護区、森林公園のいずれにもならない地域ではあるが、その環境を維持し、文化的な資源を観光利用することで地域振興につなげようというものである。生態博物館は、上から進めたものではあるが、地元住民がどう関わっているのかが注目される。頭の上に横木を乗せて髪の毛を巻きつけていく髪型で有名な六枝梭戛のミャオ族は、フジテレビの「なるほど・ザ・ワールド」が 2004 年に取材している。交通の便は良くない。
- ・ 貴州省の面積の 70% はカルスト地形と言われていて、カルストを資源として押し出していくことが今の方針の一つとしてあるようだ。新たな観光地では、カルスト地形を意識したものが多い。
- ・ 貴州省の観光は、これまで西線と東線が中心だったが、最近では、北線、南線と呼ばれる新しい観光地が登場してきた。北線としては、赤水のあたりが、むかし夜郎国があったところで、国王は川の上流から竹が女性の股を通ったことから生まれたという竹王伝説がある。日本のかぐや姫伝説は、竹の中から生まれた女の子だが、ここでは竹から男が出てくるという話である。この地域は「竹子（ちくし）の里」として売り出そうとしており、竹博物館をつくる構想もある。
- ・ 1989 年以降、貴州省はフランスからの観光客が多い。それ以前は日本人が多かった。
- ・ 貴陽市内の省体育館にバス発着場があり、そこから貴州省の各方面へのバスが出ている。

<黔东南苗族侗族自治州での民族観光開発の流れ>

- ・ 雲南省は「滇」、湖南省は「湘」という別名があるように、貴州省は「黔（チェン）」という別名がある。自治州の名前はそこに由来している。
- ・ 曾先生が、1994 年から貴州省の東線と呼ばれる地域で、観光に関連した研究を始めたのは、少数民族を調べるために現地に入った頃が、偶然にも観光開発の時期と重なったためである。最初は、郎徳上寨に観光客として入って、その後、徐々に深く入っていった。観光をきっかけにインフラ整備が行われ、村の様子が変わって来たのには驚いた。
- ・ 観光行政側では、呉徳海さんが副州長で観光を担当し、現場作業は潘心雄さんが行っていた。潘さんは上海外国語大学の学生だったが、文革で台江の農村に下放され、その後中学校の英語教師、さらに外事弁公室主任に抜擢された。旅游局が設立されると局長になった。民族風情旅游点の選定は、彼らが行った。
- ・ 一方、文化行政の側としては、貴州省文化庁文物処処長だった呉正光さんが、少数

民族の文化が新中国になって急速に衰退しているという危機感を持っており、民族文化振興の方策を模索していた。呉正光さんは、ミャオ族だが貴州省全体のために動いており、当初はトン族に関する施策で北京とのパイプ役だった。

- ・ 呉正光さんが、南部トン族の鼓楼・風雨橋の認知を図るために北京から人を呼んだ視察の過程で、たまたま道すがら寄ったのが郎徳上寨である。当時は、トン族についてばかり考えており、ミャオ族については、まだ十分には考えてなかったが、村のホスピタリティが高いため、このミャオ族の村でも観光開発がうまくいくと考えたのが、自治州での民族観光開発の始まりである。
- ・ 1986年から始まった民族観光は、10年で郎徳上寨のように成功した村の様子が他の地域にも伝わっていった。1995年に自治州は、中核産業として観光産業を発展させていくことを明確に方針として打ち出した。
- ・ 野外博物館構想は、おそらく1970年代のフランスにおけるエコミュージアムの動きにヒントを得たのではないと思われる。同時期にも、雲南省で野外博物館構想を持っており、おそらく書物などを通して、そうしたヒントとなる情報が入ったのではない。後のノルウェーが関与した生態博物館を除き、外国人が直接、指導しているということは聞いていない。
- ・ 野外博物館構想は、ちょうど貴州省の状況と合致していた。そこで、ミドルマンである自治州副州長、外事弁公室、旅游局などの人たちが積極的にイニシアティブを執って、現地調査や通達・法律の整備など、実現に向けて動いていった。地元の文化人が自覚して、観光面で動いたという話は聞いていない。

<民族風情旅游点の指定>

- ・ 1986年「民族風情旅游点」として、最初に郎徳上寨を含む7ヶ所が指定された。この七ヶ所とは、7つの村とは限らない。凱里市内にある舟溪という地域も、村ではないが7ヶ所の中に含まれている。
- ・ 最初に指定されたこれら7ヶ所が、その後、どうなったか興味深いところである。恐らく失敗したところもあるのではないかな。成功例と失敗例を比較研究するのも面白いのではないかな。
- ・ 黔东南国際旅行社の人たちによると、村の担い手がしっかりしているか否かが、観光開発成功のポイントになっているようだ。
- ・ 当初、民族風情旅游点を指定するときに、文化の特徴、アクセス性、リーダーシップを執れる人材、ホスピタリティなどを考慮しており、指定されているところはそれらの条件をクリアしているはずだが、長い目を見たときに維持できているかどうかの問題である。
- ・ 報京という北部トン族の村は、7ヶ所の一つだが、南部トン族と違って、衣装に特徴が少なく、距離が遠いということもあって、あまり賑わっていない。

<観光開発の積極化に転じた台江県>

- ・ 郎徳上寨と同じ黔东南苗族侗族自治州にある台江県の施洞では、フルシーズンの観光でなく「節日観光」と呼ばれる祭りのときだけ集客する形式をとっており、姉妹飯と龍舟祭が二本柱になっている。
- ・ 台江では、ドラゴンボートレースができるように川を堰き止めたり岸辺を整備したりしている。十年ほど前は、台江県は伝統文化に冷淡で、観光開発にも一番消極的だったところである。そうした意味で郎徳上寨がある雷山県とは対極的だった県だが、今やホテルも沢山整備されており、信じられないほどの変化となっている。
- ・ 台江県は、以前、ダム整備に積極的だったが、今は、経済効果を狙って、世界遺産登録を申請しようという動きがあり、伝統文化を観光と結びつけることに力を入れている。

<南部侗族風情旅游区>

- ・ 黔东南苗族侗族自治州の観光地は、大きく舞陽河風景名勝区、苗族風情旅游区、南部侗族風情旅游区と3つに分かれているが、舞陽河風景名勝区は自然観光、川下りがメイン、苗族風情旅游区はミャオ族の民族観光が資源、南部はトン族の観光資源を中心とした地域である。
- ・ 南部侗族風情旅游区は、鼓楼の争いのようなところがあり、村同士でも競争をしている。旅行社は、火災で鼓楼を再建した高増よりも、古い鼓楼が残る肇興や紀堂の方が、より真正性が高いということで、客を連れて行くことが多い。
- ・ 旅行社は、漢族地域から遠いところに連れて行く傾向があり、これには欧米系の観光客の考え方が反映されていると思われる。
- ・ 自治州内を東西に分水嶺が横断しており、それを越える道が良くない。南部はむしろ桂林の方から入るのが便利であり、南部への観光客は、桂林の旅行社が桂林から連れてきて、ローカルなアテンダントを凱里の旅行社に頼んでいるというケースが多い。
- ・ 日本のトン族の研究は、広西壮族自治区の三江が多いが、黔东南苗族侗族自治州内は相対的に少ない。

<郎徳上寨の若者たちの観光出稼ぎの影響>

- ・ 『中国における少数民族の「観光出稼ぎ」と村の変貌』という論文は、郎徳上寨村の出身者を中心に若者に1人ずつインタビューし、どんな形で外に出て行って働いたのかを年表形式で記述するとともに、民族文化に対してどのような思いを持っているのか、ということも調査したものである。彼らの希望はUターンではなく、Jターンである。村には戻りたくないが、外のテーマパークやレストランで働いたノウハウとお金で、将来は、故郷の近くの町でショーと食事をセットにしたようなレ

ストランを開くのが夢という若者が多い。しかし、残念ながらほとんど達成できていない。他村の出身者だが、1人だけ達成できそうな若者がいる。

- ・ また、村の祭や若者たちの状況を、新中国が出来てからの変化、観光開発後の変化（1980年代後半から）、出稼ぎで働くようになってからの変化という3つのステップごとに、描いている。
- ・ 郎徳上寨がある地域は、同じ祭りを村ごとに日を違えて行っており、本来、郎徳上寨は川筋では最初に行っていたが、今では、川筋で最後に祭りを行うようになった。これは、若者たちが祭日に戻ってきても、出稼ぎ先の仕事で踊り飽きているために、まず他の村で遊んでから最後に自分たちの村で踊るようになったからである。
- ・ 従来なら若い男女は恋の歌をかけあうことで語っていたが、今はテレビの普及や出稼ぎで外の世界の情報を知るにつれて、そういう風習を恥ずかしくなり、やらなくなっている。

<郎徳上寨の状況>

- ・ 一番観光で成功した郎徳上寨の近くに郎徳下寨という村があり、こちらの方がむしろ車道に近いところにある。この二つの村は同じ一族と言える近い関係にある。郎徳上寨への道は悪かったが、今はかなり整備されている。季節のお祭りなど、観光ではない本来の生活の中では、上と下の村で共同で行うことは沢山ある。
- ・ 郎徳上寨の観光客を受け入れている広場は、観光用につくられた広場である。本来は、広場とも言えない小さな空間で踊りをやっていた。今でも、本当のお祭りのときは、最初にそこで踊り始める。しかし、人数的に収容しきれないので、観光用の広場に移動し、さらに村の門の外の川岸につくったバスケットボール場を使っている。闘牛だけは、郎徳下寨の下の河原まで降りてやっている。
- ・ 郎徳上寨への個別客は、村の中を勝手に歩いて、家を覗いたりしている。村人は、それをよしとしている。観光客が村に入るときは、取りこぼしもあるようだが、基本的に料金を徴収し、統計も取っている。
- ・ 郎徳上寨は、観光開発の成功例として取り上げられることが多いが、問題もある。村の前の川に架かっている屋根付きの橋は、壊れたままで修復されていない。伝統的な景観にそぐわないものは排除しているが、1軒だけテラスを青のガラス張りにした家もある。
- ・ 今は、若者たちの方が、観光客が多いことに反発している。踊りの輪の中に入ってまで写真を撮る客に対して癪癪を起こした若者と、それをなだめる年長者というシーンを見たことがある。12年に一度のお祭りのときにも、あまりに観光客が多いので若者たちが反発していた。通常とは反対に、観光開発を担ってきた年長者に対して、若者の方が「行き過ぎだ」という批判が出るようになってきている。世代によって考え方が、かなり違うようだ。ただし、それが大きな声になっているかどうか

かはわからない。転換期に来ているのかもしれない。

<オーセンティシティ>

- ・ 地元民にとってのオーセンティシティと、評論家や文化行政官のオーセンティシティは別である。中国、特に民族観光の場合、観光客は何がホンモノで、何がニセモノかについて、あまり頓着しない。ただし、バックステージの本当のお祭りの踊りと、観光の踊りは別個に考えられているなど、本来のものは村の若者たちに認識されており、創意工夫で作られた踊りは、本当のお祭りのときはやっていない。しかし、古い踊りを知らないで育ったさらに若い世代がどういう態度を持つかはわからない。数年後、十年後と見ていく必要があるだろう。
- ・ 文化というものは強いところが勝つ。やがて強い文化が、弱いところに入っていく、本物になっていく。それを審査したり、認定したりする文化行政官などにとってのオーセンティシティと、地元にとってのオーセンティシティは、また違うものである。

<旅行社や観光客の少数民族に対する態度>

- ・ 中国では、旅行社が、絶えず上から現地を見下ろすという態度が見られる。ツアーガイドやアテンドの人たちの意識は、かなり低い。そうしたガイドが、地元のコードを観光客に説明しないために、観光客が地元のマナーについて理解していないと感じることも多い。
- ・ 中国では都市と農村の格差は、意識面でも激しい。「連れてきてやっている」「見せてやっている」という意識は、中央に近いガイド側に多い。
- ・ 地元側が自律的に「この日はダメ」と言えるところまでは行っていない。自主性が実現できる範囲は限られている。
- ・ ただし、この4年間で電話が普及し始めたので、観光客がいつ来るかという情報の入手が早まってきた。それにより、少しは余裕を持って対応できるようになったのではないと思われる。

<観光スポットの一点集中化の構想>

- ・ 台江県や丹寨県では、周辺地域の観光スポットを一ヶ所に集め、そこに各村から参加して観光提供しようとする構想が進められている。台江県では、フルシーズンの観光地がないが、一ヶ所に集めればフルシーズンで提供できると考えている²。
- ・ そうした構想に対して、各村がのるかどうかだが、のる可能性は十分にある。現在のように個々に民族観光村として存在するやり方だと、潤う村と外れる村との格差

² 曾先生注：明確にこの構想を語ったのは丹寨県旅游局主任でした。台江県では、すでに、姉妹飯節の時、县城の広場で県内各地の演者が集まって演じています。

が出るが、一ヶ所集中型であれば、演技の機会と収入を得る機会を享受できる村の範囲が広がる。

<その他のヒアリング対象者候補>

- ・ 潘心雄さんは、香港に行かれたことまでは知っているが、その後の行く先はわからない。この方と副州長だった呉徳海さんが組まれて、最初に 1986 年に 7 ヶ所の観光スポットを選定した。
- ・ 郎徳上寨党支部書記の陳正涛さんのお話は、ときとして不確実なこともあるので、傍証なども取った方が良い。
- ・ 郎徳上寨の旅游指揮を執った陳光輝さんは既に亡くなっている。有能なシャーマンは早死にすると本人が言っていたが、実際に 50 代で亡くなってしまった。ご子息はいるが、シャーマン特有ののりうつった状態（巫病）がまだ来ていないようである。
- ・ 反排木鼓舞の考案者である万正文さんは、故郷の反排村に戻っている。
- ・ 紅楓湖民族旅游村で上刀山のアトラクションを行っている龍虎さんは、紅楓湖民族旅游村に土地ももらっているので、今も弟子でもある奥さんと一緒にいると思われる。

<その他の視察対象地候補>

- ・ 一番、情報を持っているのは黔東南国際旅行社だと思われる。
- ・ 曾先生が知る紅楓湖民族旅游村の演者は、ほとんど故郷に戻っており、今の演目がどうなっているかはわからない。客のメインは、貴陽の富裕層と四川省、上海などの企業の慰安旅行である。客層などを見るためにも、週末に行くのが良いのではないかと。貴陽からだ片道 2 時間はかかる。
- ・ 南花村は、凱里市から郎徳上寨に行く途中にある村で、今、勢いがある村である。村人たちの、ホスピタリティが高く、質問にも応じてくれるかもしれない。村は、雷山県ではなく凱里市に属しており、観光収入は凱里市の方に入るため、凱里市から南花に案内されることが多くなっているようだ。婦女主任（婦女連合会のような組織の役職）は、郎徳上寨の観光開発で功があった党支部書記の娘であり、村の踊りなどは彼女が教えている。日本人が寄付した小学校がある。キリスト教徒がいるので教会もある。最近、新しい広場を村の奥につくって、そこで踊りを見せようとしている。
- ・ 榕江県擺貝村は、昔のままだとしたら、辿り着くのは山登りの道で大変だと思われる。旅行業者に言わせれば、この村の男子の服装は、白い鳥の羽が裾に付いていて独特である。村民は、まだ素朴で、観光開発を希望していた。これから成功する候補地かもしれない。しかし、既に観光開発を断念しているかもしれない。

- ・ 民族風情旅游点に 1986 年指定された 7 ケ所のひとつ麻塘村は、革家人³の村で、成功例と言える。休憩所やトイレが整備されている。
- ・ 生態博物館の一つである錦屏県隆里などは面白いかもしれない。
- ・ 屯堡古鎮は、明代に移り住んだ漢族がいるところで、安順の住民はイ族、平壩の住民は漢族と名乗り続けている。仮面劇でも有名であり、国立民族学博物館の塚田誠之さんが、この集団について研究している。
- ・ 同じような場所として、恵水县青岩古鎮があり、村人たちが素朴で、新しい観光地として脚光を浴びるようになっている。歴史文化名城に指定されているが、村人の参与の度合いはわからない。
- ・ 湖南省の鳳凰古城では、一業者が観光開発の権利を買い取って、事業を進めている（東北大学の方の博士論文の発表による）。
- ・ 興義県では、貴州醇の酒造所を工業観光の観光地として売り出している。マオタイ酒は高く地元の人には手が出ず、貴州醇の方が人気がある。

³ “革”の字は、現地表記では“にんべんに革”の字で表記（編者注）。